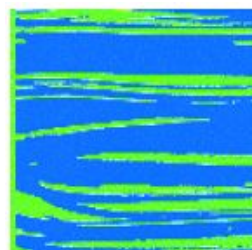


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2017年 夏号 No. 87 (2017年07月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

医療行動分析学研究会開催記: 「医療行動分析学研究会」アルバム第2頁……………飛田 伊都子
ABAI / SQAB 2017 体験記: SQAB 40th Annual Meetingに参加して……………片山 綾
Rで始める一事例の実験デザイン参加記 (2)……………小幡 知史
『行動分析学研究』の一般公開について……………中島 定彦
編集後記……………ニューズレター編集部

<医療行動分析学研究:開催記>

「医療行動分析学研究会」アルバム第2頁

医療行動分析学研究会 幹事 飛田伊都子

(滋慶医療科学大学院大学)

医療行動分析学研究会は、日本行動分析学会より研究会開催助成のご支援を賜り、年一回のペースで開催させて頂きまして、早くも今回が3回目となりました。ここに、平成29年2月19日にウインクあいち(愛知県産業労働センター)で行った「第3回医療行動分析学研究会」の内容をご報告させて頂きます。今回の参加者は計71名で、把握できている範囲ですが、関東地方から9名、中部地方から19名、関西地方から38名、そして、中国地方および九州地方からそれぞれ1名の方にご参加頂きました。

午前中の教育講演では、大阪市立大学名誉教授である伊藤正人先生に「行動分析学から見る日常場面の人間行動」というタイトルでご講演頂

きました。ご講演内容は、日常場面の出来事は行動の問題、日常場面の行動分析学の枠組み、行動分析学の科学観、行動分析学から見る「心」、そして行動健康心理学の展望という5つの内容で構成されていました。日常生活場面から、崖っぷち犬や放置自転車、依存症等を例に挙げてヒトの日常行動を行動の原理からみると、これまでとは異なる見方ができる事をご紹介頂きました。良い結果を生む行動は繰り返されることや社会的効用の高いものは多くの人に好まれること、目先の小さな快楽は強力な効果をもつことが紹介され、これらは行動の原理を用いて説明可能であり、このような原理を理解することで多くの社会問題の解決に繋がることが紹介さ



大阪市立大学 名誉教授 伊藤正人先生

れました。この行動の原理を基盤にした学問が行動分析学であるが、物理学者であるエルンスト・マッハを紹介され、マッハの科学観は行動分析学を理解するうえでも類似する点があり、関数分析こそ科学の王道であるという視点に立つことは行動分析学とも重なりと紹介されました。さらに、行動分析学の視点に立った「心」とは、皮膚の内側に閉じ込められたものではなく、個体と他者との相互作用の中にこそあるものと解釈し、心は社会的産物であると理解することの重要性が紹介されました。最後には将来的展望として、自己制御と価値割引の概念を用いる行動健康心理学という考え方の必要性が提案されました。一見難しいとも思える原理を、日常場面を例に挙げて分かりやすくご解説下さり、多くの参加者に大変好評でした。

午後には、話題提供として5つの研究演題が発表され、医療・介護現場における報告だけでなく、動物実験による知見も報告されました。

1 演題目は、東邦大学の松永佳子先生による『新生児の泣き』に対する対処行動の獲得：新生児人形を用いたシミュレーション教育プログラムの開発であり、当該発表は研究計画段階のものでした。助産学を専攻する臨床経験のな

い看護系の大学院生を対象として、新生児の「泣き」に対する対処行動の獲得を目指した教育的プログラムの有効性の検証についてこれから取り組む計画をご発表下さいました。研究開始前の計画段階のものでしたので、会場の参加者から改良点等の示唆を得て、更に良い研究になるのではないかと期待できるご発表でした。次回は成果をご報告頂きたいと願っております。

2 演題目は、労働安全衛生総合研究所の北條理恵子先生による「低濃度のニオイが学習・記憶機能に及ぼす影響」であり、動物実験によるご報告でした。学習課題遂行中のラットに対し数種類のニオイ刺激をそれぞれ提示し、提示前後のオペラント学習課題の遂行の変化の有無を調べる内容でした。当該研究は、ニオイが記憶・学習機能といった脳の高次機能に影響を与えることを実証したものであり、作業遂行中のニオイ刺激の有無により低濃度であってもパフォーマンスに与える影響を考慮する必要があることを提案するものでした。

3 演題目は、東京大学医学部附属病院の笠原論先生による「慢性疼痛患者の疼痛行動に対する行動的介入：患者によるグラフ作成」であり、慢性疼痛を有する患者に対する介入の成果が報告されました。**Fordyce (1976)**により提唱されている疼痛を「疼痛行動」と捉える概念を参考に、オペラント的随伴性を明らかにし、重要な他者の行動を変えることで疼痛行動を軽減させることを目的として、行動分析的介入を試みたものでした。患者がグラフを自己作成することをテーマとして、「どのような特徴の患者がこの方法により適合しやすいのか」について検討した内容のご報告でした。

4 演題目は、グループホームせせらぎの高橋恵子先生による「認知症介護現場の実践事例から：介護現場を科学する観察・記録から介入方法を考える」であり、介護現場からのご報告でした。当該発表は、グループホーム入居当初より、短時間に言語の繰り返し（パパパ・・・）が見られた脳血管性認知症を有するA氏を対象に

baseline→介入A→baseline →介入Bを試みたものでした。baseline では観察した結果を記録するのみとし、介入Aでは「深呼吸を促す」「テレビを消す」「お茶を出す」の対応を提示し、介入Bでは「耳元で興味のある話をする」「歌を歌って聞かせる」「本や写真を眺めてもらう」の対応を試みておられました。その結果、介入Aで意味のない言葉が減少し、介入Bで意味のある言葉が増加したとのご報告でした。

5 演題目は、滋慶医療科学大学院大学の佐々木雅子先生による「回復期リハビリテーション病棟の認知症高齢者に対する自律的口腔ケアプログラムの有効性評価」であり、急性期病院回復期リハビリテーション病棟に入院中の認知症高齢者10名を対象とし、自律的口腔ケアを目指した行動分析学的プログラムの有用性を評価したご発表でした。対象者をコントロール群5名と介入群5名の2群に分け、口腔ケア行動を24の行動単位に分け、コントロール群には言語教

示およびモデル教示のみを行い、介入群には言語的称賛、タッチング、細菌数表示マークをカレンダーに貼付する介入を追加するという内容でした。その結果、自律的口腔ケア行動は介入群の方が促進することが明らかになり、さらに介入群がコントロール群に比べ口腔内細菌数が低減できたことが報告されました。

当該研究会は、医療者に携わる方を対象に行動分析学とともに学ぶ研究会として平成27年3月に産声を上げました。それからこれまで、多くの行動分析学の基礎の先生方のご支援を賜りまして、少しずつではございますが発展してきております。ここに、アルバムの新たな一ページをご報告できる事に感謝して、重ねて平素お世話になっている諸先生方のご支援に、深く御礼申し上げます。

今後とも引き続きご支援の程、よろしくお願い申し上げます。



第3回医療行動分析学研究会 集合写真

医療行動分析学研究会

世話人：鎌倉やよい（日本赤十字豊田看護大学）

幹事：飛田伊都子（滋慶医療科学大学院大学）

事務局：滋慶医療科学大学院大学 飛田研究室

e-mail：koudou2015@yahoo.co.jp

U R L：https://sites.google.com/site/iryokoudou/

「第4回医療行動分析学研究会」は、平成30年3月11日（日）ウインクあいちに開催予定です。

SQAB 40th Annual Meeting に参加して

片山 綾

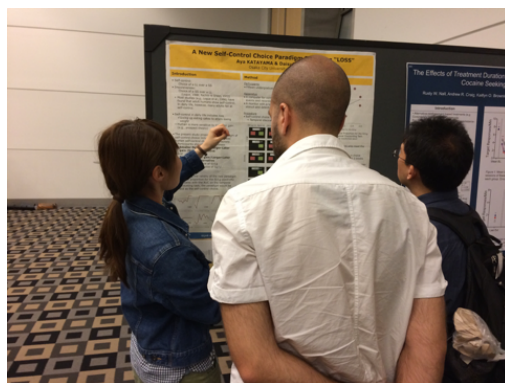
(大阪市立大学大学院文学研究科)

後期博士課程1年の片山綾と申します。この度、デンバーで開催された SQAB に参加して研究発表を行いましたので、その報告をさせていただきます。

私は、従来のセルフ・コントロールパラダイムで考慮されてこなかった「損失」を含む新しいパラダイムの検討を研究テーマとしています。今回の SQAB では、このテーマで執筆した修士論文の内容の一部について、1日目にポスター発表を行いました。「誰も聞きに来てくれなかったらどうしよう」という気持ちでいっぱいでしたが、幸いにも多くの方が次々に発表を聞きに来てくださいました。発表原稿を作っていたのですが、実際に発表を始めるとそんなものを見る暇はほとんど無く、軽いパニックに陥りながら何とか発表を行いました。どの方も私の拙い英語を真剣に聞いてくださり、コメントや質問、関連する論文の情報などを頂きました。日本の学会でも何度か同様のテーマでポスター発表を経験していましたが、新たな発見がいくつもあり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

また、2日目の朝には憧れていた Green 先生のシンポジウムがありました。ご挨拶したいと思っていたところ、シンポジウムの開始前に一人でコーヒーを淹れている Green 先生を見かけたため、思い切ってご挨拶させて頂きました。Green 先生はとても気さくで、優しい方でした。自己紹介と研究について少し話せただけでしたが、大きな収穫でした。

学会以外では、眞邊先生を始めとする日本人



の先生方と美味しいハンバーガーを食べられたのが良い思い出です。日本人の参加者が少ないため、普段日本ではあまりお話する機会のなかった先生方ともたくさん話すことができました。そこで研究についてのコメントを頂いたり、研究生活についてお聞きできたので、これもアメリカで行われる国際学会に出席することのメリットだと感じました。

反省点は、やはり英語能力の不足です。話すことは目を追うごとに徐々に慣れていったのですが、聞くことができず、拙い英語を喋るだけ喋ってそれについての返事を聞き取ることができない、ということが多々ありました。また、英語に自信が無いために消極的になってしまうこともあったため、来年の SQAB までにはもっと英語能力を向上させたいと思います。

今回、一人で海外に行くのもアメリカ旅行も初めてで、出発直前には逃げ出したくなりました。しかし、発表申込は完了しており、周りの人にも「アメリカで発表してくる」と公言してい

た私は逃げ出すことができず、何とかアメリカ
行きの飛行機に乗り込み、初めての国際学会で
の発表を終えることとなりました。身をもって

“コミットメント”の大切さを知った旅でした。
これからも研究に精進し、来年の **SQAB** にも是
非参加したいと思います。

R で始める一事例の実験デザイン参加記 (2)

小幡知史

(常磐大学大学院人間科学研究科)

去る 2 月 26 日、慶應義塾大学三田キャンパスで開催された公開講座「R で始める一事例の実験デザイン」に参加させていただきました。R というソフトの存在自体は知っていたものの、なかなかきっかけが無く手付かずのままでした。しかし、この公開講座を知り、「これ以上のきっかけはないぞ」と思い、すぐに申し込ませて頂いた次第です。

講座ではまず、一事例研究の特徴や各種デザインなど基本的な事柄をご説明いただいた後で、実際にデータを入力・処理することで R の使い方を学ばせていただきました。

講座内容の分かりやすさや工夫もさることながら、特に感銘を受けた点があります。それは、R を用いることによって、①グラフ化、②統計的検定、③効果量の算出が「あっという間に」できることでした。実際に、講師の藤巻先生が開発された SRCT パッケージを用いることで、R に初めて触れた私でもほとんど苦なく上記の 3 つが「あっという間に」できました。これまで、グラフ化であれば、Excel で出力したグラフに条件変更線を入れたり、条件名をテキストボックスで追加したりと、いくつか手間をかけなければいけませんでした。しかし、この SRCT パ

ッケージで出力されたグラフは、条件変更線も各条件名がすでに入っているのです。この反応労力の劇的な低下は、昼間は福祉施設で働き、夜は大学で動物実験に勤しむ私にとっては何よりもありがたいことです。また、限られた時間的リソースの中で研究をされている諸先生方にとっても、非常に有用なツールになると思います。

きっかけがないといった理由で学習していなかったが、いざ学ぶと研究において極めて有用となるツールやテクニックが多いことを今回の講座で実感することができました。今回の R もそうですが、一昨年に受講させていただいた自主公開講座「行動工学ワークショップ」で Arduino という電子装置の使い方を教えて頂いた時にも、同様の感動を覚えました。こういったツールやテクニックを適切に学ぶことのできる機会は、多くの研究者にとって自身の研究をより効率的に進める上で、とても強化的に働くことでしょう。

最後に、このような非常に有益なワークショップを企画し、丁寧なご指導をしてくださった藤巻峻先生に改めて、お礼申し上げます。ありがとうございました。

『行動分析学研究』の一般公開について

編集委員会 委員長 中島定彦

既に学会ウェブページでお知らせしておりますように、本年3月末日をもって国立情報学研究所「電子図書館サービス」(NII-ELS)が終了しました。これまで同サービスにより有料で利用可能であった機関誌『行動分析学研究』収載論文のダウンロードは、科学技術振興機構「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)により無料で行えるようになりました。URLは以下の通りです。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjba/8/2/_contents/-char/ja/

現在、1987年の創刊号から2016年3月発行の第30巻第2号までのバックナンバーがすべて無料でダウンロードできます。第31巻第1号以降については、発行から1年以上経過した時点で無料ダウンロードできるようになります(第31巻1号は2016年8月25日に発行されていますので、公開は本年8月末になる予定です)。

ご注意いただきたい点として、発行年表示の

ずれがあります。J-STAGEの設定の都合で巻数(Vol.)は年度で表示されます。一方、『行動分析学研究』誌は発行年表示ですので、各巻の第2号については、1年のずれが生じています。例えば、第30巻第2号については、J-STAGEでは「行動分析学研究 Vol. 30(2015) No. 2」のように表示されていますが、機関誌表紙には「行動分析学研究 2016 Vol. 30 No. 2」のように印刷されています。こちらが正式の発行年となりますのでご注意ください。J-STAGEからダウンロードした各論文の巻頭左上に記されている発行年は正式の年数になっています。

なお、年次大会発表論文集の収載論文については、2015年度(第33回大会)までは、国立情報学研究所学術情報ナビゲータ(CiNii)から無料でダウンロード可能になりました。2016年度(第34回大会)以降の年次大会発表論文集の収載論文の取り扱いについては、理事会で検討しているところです。

編集後記

ようやく梅雨が明けたと思いきや、なかなか晴れ間が覗かないお天気が続く今日この頃ですが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。今号もなんとか季刊ペースを守って、無事(?)に皆様のお手元にお送りすることができ、一安心です。ご執筆いただきました先生方には改めて御礼申し上げます。

さて、お気付きのように本号は、記事の数が若干寂しい状況となっています。本ニューズレ

ターは皆様からのご寄稿だけが頼りです。引き続き、各種連載記事や、海外学会の参加記、行動分析学への熱い思いなど、様々な内容の記事を募集していますので、皆様からのご寄稿をお待ちしています。

それでは、これからうんざりするような暑い季節がやってきますが、お体にお気をつけてお過ごしください。(MK)

J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部心理学研究室

日本行動分析学会ニュースレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp